

揚げひばり 詩：ジョージ・メレディス

ひばりは舞い上がり、旋回し始め
銀色の声の鎖を落とす
切れ目無く沢山の声の輪がつながっている
さえずり、笛の音、なめらかな声、震えるような声

空を一杯に満たすまで歌い続けるのは
声がしみ込んでいく大地の愛のためだ
そしてはるかに羽ばたき上がれば
私たちの谷は彼の金色の杯となり
彼はそこからあふれ出る酒となって
私たちも彼と共に昇っていく

迷子になっても、空の裡に残り
光の中で、そして空想の中で歌う

「峠花」 山本邦山(1937-2014)作曲**

この曲は1983年に尺八と十七絃のために作曲された曲である。
我々は常に何かに安らぎを求めている。旅先で新しい自然に触発される情感、その中にわずかな安らぎを求めることができるならば、との願いから、対象物をできるだけ小さなもの、そして遠くにあるものとして『峠花』と題した。
目に眩いほどの新緑や、一帯の紅葉に心を傾けることはさることながら、人知れず咲いている四季折々の名も知らぬ野花達にも大いに心を打たれる。つる状の茎を這うように伸ばし、群れをなして咲いているものや、周りの草木の間から背伸びしているもの。又岩や崖下にしがみ付いているもの一と、いずれもその姿は可憐であり、色鮮やかに誇らしげには見えるが、寂しさをこらえながらも、力強く咲いている姿でもある。

この曲はそのような感動の一瞬を、地方色に織り込みながら音につづったものであり、この思いがけない花との出会いは、深い心の喜びにもなり得ることであろう。(作曲者)

十七絃は低音域を担当する楽器として宮城道雄が考案し、大正10年に初めて演奏された楽器である。

文 小畔、川村*
清田**
尾崎***

演奏者プロフィール



小畔香子 (箏、十七絃)

NHK 邦楽技能者育成会48期終了。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。同大学院修了。在学中宮城賞、安宅賞、アカンサス音楽賞を受賞。宮城道雄記念コンクール第一位入賞。台湾にて地唄三味線の特別講師を務めるなど国内外で活動。主なTV出演としてNHK Eテレ「にっぽんの芸能」「古典芸能鑑賞会」「音楽ブラボー」などに出演。宮城社大師範。宮城合奏団団員。山手学院箏曲部講師。



川村葵山 (尺八)

東京都出身。東洋大学卒業。NHK 邦楽技能者育成会第51期修了。尺八を父、川村泰山に師事。第15回くまもと全国邦楽コンクールにて最優秀賞受賞。第36回、第38回都山流全国本曲コンクールにて共に金賞受賞。現在、都山流大師範、講士補、検定員補、評議員。東京学芸大学非常勤講師。大東文化大学琴和道会、グラントワジュニア邦楽塾、和のリトミック「和学らんど」講師。和のオーケストラ「むつのを」、尺八四重奏団「破竹」、「The Shakuhachi 5」、JSPN等に所属。東京を中心に演奏活動の他、YouTubeに演奏動画を投稿、学校公演やカルチャースクール、子供のためのリトミック教室等で尺八を一般に広めるべく活動中。東京都練馬区、長野県伊那市にて尺八教室を主催。



清田千絵 (ピアノ)

国立音楽大学ピアノ専攻卒業。東京藝術大学大学院室内楽科修了。卒業時、皇居・桃華楽堂での御前演奏等に出演。国内外研修奨学金によりザルツブルク夏期国際音楽アカデミーを受講。静岡AOI第10期、13期ピアニストのためのアンサンブル講座を受講。これまでにピアノを出羽真理、玉澤敬子、草野明子の各氏に、室内楽を長尾洋史、松原勝也、迫昭嘉の各氏に師事。2014-2020年東京藝術大学室内楽科教育研究助手。



尾崎羽奈 (ヴァイオリン)

愛知県立芸術大学を経て、東京藝術大学大学院修士課程修了。第1回ルーマニア音楽コンクール(現在のルーマニア国際音楽コンクール)弦楽器部門第2位、併せて猪谷千春賞受賞。別府アルゲリッチ音楽祭、文化庁主催舞台芸術国際フェスティバルなどの音楽祭に出演、ポーランド国際マスタークルゼ、グーテンシュテイン国際マスタークラスなどでも研鑽をつんだ。2008年よりテーマに基づいたコンサートを定期的に主催。独自の視点にもとづいた切り口の企画は毎回好評を得ている。現在、東京藝術大学教育研究助手のかたわら、認定NPO法人TAMA音楽フォーラムにて運営に携わる。「INVITE」代表。

INVITEコンサートシリーズ異国情緒②

東への憧憬、 魅惑の西

～20世紀前半の音楽世界～

2021年12月23日(木)

15時00分開演(14時30分開場)

| 主催 |

INVITE

自由学園明日館 講堂

東京都豊島区西池袋2-31-3



｜ プログラム ｜

宮城道雄作曲

春の海

箏：小畔香子 尺八：川村葵山

宮城道雄作曲

虫の歌

箏：小畔香子

ロベルト・シューマン作曲

アラベスク ハ長調 作品18

ピアノ：清田千絵

クロード・ドビュッシー作曲

ヴァイオリンソナタ 短調

I Allegro Vivo

II Intermède : Fantasque et léger

III Finale: Très animé

ヴァイオリン：尾崎羽奈 ピアノ：清田千絵

— 休 憩 —

レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ作曲

ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス

「揚げひばり」

Andante sostenuto - Allegretto tranquillo(quasi Andante) -

Tempo del Principio

ヴァイオリン：尾崎羽奈 ピアノ：清田千絵

山本邦山作曲

峠花

十七絃：小畔香子 尺八：川村葵山

｜ 曲目解説 ｜

「春の海」 宮城道雄(1894-1956)作曲*

箏と尺八の二重奏による宮城道雄の代表作。昭和5(1930)年の宮中の歌会始(うたかいはじめ)の勅題「海辺巖(かいへんのいわお)」に因んで、前年の12月に作曲。かつて訪れた春の瀬戸内海の印象に基づいている。

「虫の歌」 宮城道雄作曲*

箏のいろいろな奏法を駆使して、秋の野にすだくさまざまな虫の声を描写し楽想を展開させている。

曲の前半は四分の四拍子で、四つの小部分に分かれる。まず①ではこおろぎが登場し、②ではかねたたきの声を聞かせる。ハーモニックス、スタッカートなどを利用している。③では、爪をはめている右手の中指と薬指で糸を擦るスリ爪という奏法と、ハーモニックスを使って馬追い虫に鳴かせる。④は、鈴虫の声を最高音の二絃のトレモロで表す。この二絃は特別の調絃を押手の強弱で音高を変化させている。この部分だけでなく、この曲の前半では臨時の調絃の変化がたいへん多い。

曲の後半は速度を速めて二分の二拍子になり松虫とくつわ虫の対話を描く。消し爪や、右手薬指によるピッチカートなどが用いられ、また明治時代の唱歌「虫の楽隊」の旋律が織り込まれている。

シューマン(1810-1856)：アラベスク ハ長調 作品18**

1838～39年、ドイツロマン派の作曲家、シューマンが28歳の頃、作曲した。シューマンのop.1から23はピアノの曲である。ピアニストであるクララと婚約しながら、クララの父から結婚の反対を受けている時期に書かれ、不安定な心境や募るクララへの想いも反映されているのではないか。

曲はA-B-A-C-A-codaから成る。アラベスクとはアラビア風のという意味であり、アラビアの風の装飾、唐草模様のことを指す。小さなモチーフを連続して繰り返し、それをだんだん展開してゆく。

装飾的で幻想的な曲となっている。

ドビュッシー(1862-1918)：ヴァイオリンソナタ 短調***

ドビュッシーはフランス印象主義音楽の立役者であり、それまでのドイツロマン主義的音楽から脱却し、音楽が近代へと発展していく一翼を担った。彼はそれまでの音楽理論から解放されて和声と音色の美を追求することで魅惑的な作風を確立し、その後のフランス音楽に多大な影響を及ぼした。このような作風が生まれ支持された背景のひとつには、19世紀後半に数度にわたって行われたパリ万国博覧会において、ヨーロッパの人々がアジア諸国の文化に触れ、ジャポニズムをはじめとする異国趣味が流行したことが挙げられる。ドビュッシーもまた、ジャポニズムに魅せられたひとりである。

本日演奏する「ヴァイオリンソナタ」は1917年に作曲され、ドビュッシーの最後の作品となった。スペイン風の旋律や中国の民族音楽を思わせる旋律に交じって、日本の五音音階や尺八を想起される装飾音などところどころに発見することができる。しかし、彼は単なるエキゾティズムに陥ることなく、その類まれなる芸術性を持って、西洋音楽の中に巧みに異種なものを取り入れることに成功している。

ヴォーン＝ウィリアムズ(1872-1958)：

ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス「揚げひばり」***

「揚げひばり」はヴォーン＝ウィリアムズの作品の中で最もよく演奏される作品のひとつである。イギリスの作家ジョージ・メレディスの詩に触発されて1914年に作曲に着手、第1次世界大戦後の1920年に完成、初演された。作品のスコアの冒頭にはメレディスの詩が掲げられている。

この時期はヴォーン＝ウィリアムズの長い音楽人生の中でも非常に充実しており、夢想的な作風が特徴である。筆者は小学生のときにアン・アキコ・マイヤース氏のCDで初めてこの作品に触れ、その幽玄とした世界観に心を奪われたのを今でもはっきりと覚えている。

この時期の独特な作風はヴォーン＝ウィリアムズが民謡・民族音楽に没頭していたこととも無関係ではないだろう。彼は若い時から民謡収集家として、古いイギリスの音楽の調査を始め、第一人者となった。彼の伝統に対する深い崇敬の念は作品の中にもよくあらわれており、「揚げひばり」も例外でない。不思議なことにとこか東洋風な薫りを感じる作品である。